わこのみ
猫蓑通信

第２１号
平成七年
（１９９５）
１０月１５日 発行
（年４回発行）

## 猫蓑会式目の整理

東 明雅

従来、猫蓑会には式目は存在したが、それを整理した式目表とでも言うべきものはなかった。唯一、「二十韻季題配置表」のカードの裏にある「句数式付去嫌」・「式目歌」はその代用であったが、近頃、その不備を痛感するようになった。

たとえば、「式目歌」の第一首「衣季や竹田の船路夢泪月松枕五句隔べし」などは、古い連歌の時代からの伝統を残したものであるが、現代人には意味も理由も分からぬだろう。

それで、現在猫蓑会で使っている式目類を整理して一覧表にしたが、左の通りとなった。

式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したまでである。大方のご参考になれば幸いである。

### 猫蓑会式目

一 心得

式目は翁の「歌仙は三十六歩なり。一歩も後に帰る心なし」を旨とし、すべての事象が輪廻にならぬよう注意する。

二 句数

1 句数は春秋三句より五句（普通三句）、夏冬一句より三句（普通二句）とし、季戻りを嫌う。

2 恋句は二句より五句続く。一句で捨てない。

三 去嫌

1 同季春秋は五句去り、夏冬は二句去り。その他、月・夢・涙など特に印象の強い文字は五句去り。

2 同字・神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・妖怪・病体・時分・夜分は三句去り、その他の題材は二句去りであるが、なるべく同じような題材は離して用いるようにする。

3 人情自、人情他、人情自他半、人情無（場）の各打越および縞を嫌う。

4 片仮名・アルファベット・数字の打越を嫌う。

四 一巻の構成

1 発句は当季とし、切字を入れる。

2 脇句は発句と同季、同時刻、同場所とし、体言止めが普通。

3 第三は「て、に、にて、らん、もなし」止めが普通。

4 発句使用字（月、花を除く）、及び恋の字は一巻再出を嫌う。

5 発句以外に切字「や、かな」を嫌う。

6 表に神祇、釈教、恋、無常、述懐、懐旧、妖怪、病体、人名、地名を嫌う。但し発句はこの限りではない。

7 月の定座はオ五、ウ七、ナオ十一（二十韻ではウ一、ナオ五）とし、場合によって引き上げることもこぼすことも自由であるが素秋を嫌う。

8 花の定座はウラ十一、ナウ五（二十韻ではナウ三）とし、引き上げることはあってもこぼさない。

9 恋は一巻に必ず出す。ウラおよびナオにそれぞれ一回出すのが普通である。二十韻ではどちらか一回でもよい。

10 体言止めまたは用言止めの五連続を嫌う。

11 挙句は発句に返らぬよう特に注意する。

五 韻律

短句下七の四三および二五を嫌う。

六 仮名遣

歴史的仮名遣・現代仮名遣どちらでもよいが、その混用を嫌う。

## 能と連句

奥村 富久子

能の道に入ったのは十三歳。俳句を学び始めたのは十五歳の頃であった。

どちらも余白、余情を大切にするところが似ている。

普通の人の煩悩が百八つなら、私のは百二十、三十は有るのではと、友達と笑い合った筈なのに、なぜか此のような道に御縁があり、一つは生涯の仕事に、後の一つは、世盛りの忙しさに途絶えた時はあっても、終生関わり続けることになったのは不思議なことである。

背景は松を描いた鏡板ばかり、小道具類は単純化したものをほんの少し使うばかりの能では、技も極限まで抑制され、炎ゆる情念、無量の悲哀、怨念さえ秘められて奥深い。

その幽かな動き、一見無表情に見える能面のわづかな照り昃りに、心豊かな見所のお客さま方は、思い思いの夢を描かれる。

時には能役者と観客の想いが一つに重なり、舞台から見所へ虹の橋が架かることもある。その悦びは譬えるものもない。

俳句もまた最も短い詩として、余情を尊ぶことは能と同じであるけれど、発句が俳句として独立し、花鳥諷詠を本意とする風潮の中で、私には何か胸の中に燃え尽くせぬ塊の様なものを抱き続けていた。

同じ能役者であった夫の死と共に、能を舞い納めて十年。身心の充実あってこそ勤め得る能に、この時点で終止符を打ったことについて、悔いは少しも残らないけれど、実生活においては、自分の美意識だけを頑なに守って不器用に生きながらも、これまで舞台の上では、皇女にも貴妃にも、また遊女にも、老残の小野小町にさえ変化して、様々な性を生き、この世の悲喜を深く味わうことが出来たのであったと、今更に思い知るのであった。

思いもかけず連句にめぐり会えたのは、五年ばかり前のことである。

能と同じ序破急の流れも、自然にうなづけたし、「月の座」「花の座」そして「恋」が大切にされるのも嬉しく、ここでもまた、我ならぬ我を生きられるのが楽しい。

付合いの面白さ、心通う連衆との風の交り。

過ぎし日、能公演で渡英した折。果てしなくつづく草原に架かる円虹を見て、峰から峰へ架かるものとばかり思っていた私は、荘厳とも言える感動を覚えたけれど、心の友と巻き上げる連句の一巻は、正に此の円虹ではないだろうか。

世の修羅を外に、連句に遊ぶことは、今の私にとって、何よりの悦びである。たとえそれが下手の何とやらであろうとも。

（能楽師・茨の会）

## 山をいで羽の初茄子

登坂 かりん

全国新庄連句大会直後、猫蓑会有志九名と、最上川の見えつ隠れつする陸羽西線に乗り込んだのは九月二日。酒田に本間美術館、山居倉庫、土門記念館と訪ね、大川周明碑の建つ日和山口から暮れてゆく庄内平野をバスは月山など秀嶺を窓外に湯田川温泉へ。昔ながらの湯治宿では方頭魚など馳走と庄内弁に心身共に寛いだ。

翌日は石原莞爾、丸谷才一の生誕地を車窓に見、致道館から城址公園へと心地よい風に頬を撫でられながら歩いた。

車は降りなかったが、芭蕉乗舟地跡の奥には、「羽黒を立ちて、鶴が岡の城下、長山氏重行といふ武士の家に迎へられて」巻いた、

めづらしや山をいで羽の初茄子　芭蕉

蝉に車の音添る井戸　重行

の一巻の発句の碑が建つ長山邸跡がある。

江戸勤番中、深川の芭蕉庵に出入りした重行は、来鶴の翁を篤くもてなしたのである。

さて平成の猫蓑のご連衆も、民田の茄子に舌鼓うち、藤沢周平描く海坂藩（庄内藩）の酒井家御隠殿にて蝉しぐれを聴き昼食。黒きマリアの天主堂も拝し－人面魚はまたも拝みそこなったが－夕刻迫る頃、庄内空港より帰途についた。

# 「ローマ連句サロン」発足

下鉢 清子

日・伊俳句交流団の最終打合せの折、日程に連句の会が組み込まれており、捌きをとのお話と共に連衆名を手渡されたとき、ローマでは東明雅先生ご考案の「二十韻」でと心づもりが出来上がっていた。慌しいスケジュールの中少ない持ち時間で、俳諧の醍醐味に浸り歌仙の序・破・急の流れを崩さずに楽しむには、「二十韻」は最も相応しい型式である。

六月十五日、ローマ日本文化会館で、「第二回、日・伊俳句交流の集い」が開かれたが、翌六月十六日に体験した初の日・伊連句の集いについて述べて置きたいと思う。

私はこの時点まで、イタリアの著名なる詩人二人が参加されるとは夢にも思っていなかった。ジェノヴァ大学教授エドアルド・サングィネーティ、ローマ俳句友の会事務局長カルラ・ヴァージョの両氏とは、前日の会で顔馴染となり俳句に対する蘊蓄に驚かされていたが、連句については初体験で興味津々の様子。先ずこの形式と忠男氏から頂いた発句について説明することから始まった。

エドアルド氏にはエットレ・コロー氏が、カルラ女史には野尻命子氏が通訳として付き、詩の直訳を荒木氏が受け持った。前句が十分に理解されなければ付句は生まれないので、詩人達は入念に質問を繰り返し、伊語に転換した後も用語の良し悪しを議論し合う。脇句「南風のつばくろ」を、通訳が「南風が連れて来た燕」と訳したので、話は地中海にまで拡がり侃々諤々、三時間の持ち時間内で満尾するであろうかと危惧が脳中を走る。併し詩人の感性のすばらしさ研ぎ澄まされた知性は、忽ちに余韻、余情を掴み取るようになり、後は一瀉千里、詩人が書く→荒木氏が直訳する→黒田杏子氏と私が長句・短句にワープロするという目まぐるしい作業に没頭させられた。

4　楽しい曲が聞こえる／十一人の詩人に
　　楽しき曲に詩人集ひぬ
5　吾が指の間に／まだ開かぬ文／月光に
　　月清しいまだ開かぬ文を掌に

短句には二行詩を、長句には三行詩を作り、熱中した詩人に負けじと、通訳もわが詩を披露する。エットレ氏は日本文学専攻の経験と、ヴェニチァ出身の誇を持つ人であるから、見事な恋句で答えてくれた。

外国語音痴の私が初の日・伊連句交流の捌をなし得たのは、荒木ヴァチカン大使の水も漏らさぬ企画並びに連衆のお陰と、改めて感謝申し上げる。帰国後、「ローマ連句サロン」発足と、東先生が顧問として迎えられたお知らせがあり、何より嬉しいことであった。

二十韻「金雀枝」　　下鉢 清子　捌

金雀枝に砕ける天の光かな　荒木忠男
　窓近く飛ぶ南風のつばくろ　下鉢清子
アンティーク大皿小皿運ばれて　黒田杏花
　たのしき曲に詩人集ひぬ　カルラ・ヴァジオ
月清しいまだ開かぬ文を掌に
　＊ エドアルド・サングィネーティ
しげき虫の音抱き合ひたる　関森勝夫
カラカラの遺跡彩り草紅葉　加藤耕子
　空も地上もストのはげしき　野尻命子
足早に神父は衣ひるがへし　渡辺 勝
　盲導犬のかしづきてをり　杏花
雪原の彼方母校の時計塔　忠男
　凍て月照らす地震の空白　カルラ
心臓の鼓動を数ふ十二回　エドアルド
　旅の疲れは杯に鎮めん　勝
ゴンドラに揺れて乱るる恋心　エットレ・コロー
　友より奪ふ街のマドンナ　勝夫
あかときにLauraの額輝きて　エドアルド
　春の暖炉に縫ひ進む絹　耕子
花万朶俳諧の座のなごやかに　清子
　没り日あたたか再会を期す　カルラ

一九九五年六月十六日満尾　於 ローマ

＊ 一九六九年オクタヴィオ・パス等四詩人と〝Renga〟を試みた。

＊＊ 「ラウラ」四行詩の確立者ペトラルカが崇拝した女性。

## 連句と私

小室 初美

何十年も前の夏、埼玉県は荒川の支流玉淀川に水遊びに行った。川巾は三十米くらい。日焼けした若者数名が向岸まで泳ぎ渡っていたが、大半はこちら側の岸でのどかにバチャバチャやっていた。私は自己流の犬かきで七八米泳ぐのがやっとなのに、どうしても向こ岸に渡ってみたくなった。岸から十米くらいは背が立つのだから、ほんの数米泳げばどうにかなると思って水をけった。が、川の中程は流れが速い。なかなかにきり進めない。力がつきてきてブクブク。仲間が気付き若者に助けられもとの岸にもどれた。なりたてとは言え一人前の社会人、大いに恥じて仲間達に固く口止めをした。

普段は慎重でぐずな私だが時には思い切ったことをしてしまう。俳句なんて高校の宿題で作っただけなのに、図書館の片隅でたまたま出会った連句の本。ものを知ったり覚えるだけでなく、ほんのちょっぴり自分を表現できたらと飛び込んでしまったのがこの講座。軽はずみな決断に後悔しながら、対岸を目指そうか、それとも引き返そうか、アップアップしながら迷っている私は、先生方や先輩方にとんだ迷惑をおかけしていることと思う。

## 石の上にも

近藤 守男

待望久しかったＡＣＣの「連句入門」に入れていただいて楽しく通っている。石の上にも三年と思い、続けるつもりである。

連句との関りは、八九年十月第四月曜日の四宮連句からである。佛渕健悟さんのお誘いであった。当夜は式田和子先生のお捌きであった。表では、初手から苦吟の私に和子先生が力添え下さり、どうにか裏に進み、そこで酒肴が出された。酒が血流を促進し、やっと人心地がついた。しかし句作りは相変わらず難渋を極め、冷汗の連続であった。

「卯の花会」という男ばかりの会に健悟さんに誘われた。ここでも和子先生から度々のご指導をいただいた。なつかしい思い出としては、慶應病院に入院中の和子先生をお見舞いした折、先生の個室で、卯の花のひよこたちを相手に一巻まいていただいたことである。

その後、連句の糸の切れかかる度、いろいろと支えられることがあり、両吟、文音も何度も経験できたが、その都度明雅先生にご講評を仰ぎ、懇切丁寧なご指導をいただいた。

以来、猫蓑会の諸先生、宗匠、先輩の皆さんのご指導をいただき、「入門」に到った。

## 危ふきに遊ぶ日は何時

中野 昌子

三年程前の事、通勤電車の中でパラパラと「クロワッサン」をめくっていて興味を引いたのが矢崎藍さんの「ころも連句会」の記事であった。「もう一つの高級な趣味見つけませんか」という特集の中だと記憶している。

早速出版された『連句恋々』を買い求めたら面白くて、一気に読んでしまった。尚、驚いたのは本の中に、以前からお付き合いある式田和子さんの名があり、連句会の大ベテランとして活躍されている様子。年賀状にその事を書いて出した所、式田さんから「家でやっていますから興味があればいらっしゃい」とお誘いを受けた。大喜びで参加したものの、その後の”ザマ“は語るも涙、恥のメッタ塗りで今日まで来ている次第。桃径庵式田邸に通い始めて早や二年足らず、ＡＣＣに入会かなって半年、先生先輩方の鮮やかな発句、達者な付け合いに唯々目を白黒、溜息するのみ。かくして甚だミーハーなスタートを切った浅学非才、超凡庸な吾が頭が、「俳諧とは雅と俗との間を縫い危うきに遊ぶものなり」という憧れの境地に浸れるのは、一体、何時の日のことだろうか。

## 歌仙「花芭蕉」　東　明雅　捌

花芭蕉庵に新たの翁像　明雅
顔も涼しげ竹杖と笠　利子
葛切りの味のほのかに喉こして　欣二
ビデオで届く近況報告　路子
名月の今は兎も棲みかねし　道子
鳴き終へし虫庭に放ちぬ　二
遠来(ウ)の友をもてなすあらばしり　路
気配りやさし年上の妻　道
優勝と胎りし嬰を両の手に　利
ポンポンポンとポプコーン出る　路
ファルーカは風いっぱいにナイル川　利
絨毯敷けば神は真近に　同
文なしの我影照らす凍し月　二
ピカソに青の時代ありけり　路
モラス縫ふインディオの娘の無心にて　二
旧婚旅行は世界一周　道
明日のこと明日にゆだねて花浴びる　路
習ひて慣れて鱒のあめ炊き　利
村(ナオ)おこし曲水の宴復活す　道
硯の墨の匂ふたそがれ　二
保険屋の出来高競ふ棒グラフ　利
活字が嫌ひアトピーの群　道
原爆忌核実験のなほやまず　二
摩文仁の丘にひめゆりの塔　道
契りたる一世の恋に悔いはなく　利
マインドコントロール逆のセクハラ　路
アラジンのラムプを借りて来たいとき　同
月をかすめて砂嵐過ぐ　利
家計簿も手書のひとのそぞろ寒　道
火だこを作るたんぽ焼く膝　利
きじ鳩(ナウ)の寄りそってゐる雪の枝　二
ギターつまびき流す芸人　道
代議士は票数ばかりあれこれと　利
ぼんぼり映ゆる雛様の笑み　二
夢に見る花は満開滝桜　雅
ほろ酔機嫌春泥の道　路

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　梅田利子　諏訪欣二　倉本路子
岡本道子

## 歌仙「夏深し」　市野沢　弘子　捌

川風にそよぐ草叢夏深し　弘子
水着の子等の賑やかな声　篤子
引き出しへ玉蟲包み納むらん　好敏
紫煙くゆらす縁側の端　淑子
月天心まっすぐな道麓まで　淑代
編みし俵をトラックに積み　てる子
念願の文学賞に温め酒　敏
年上女房さすが控へめ　篤
うれしげに結婚指輪きらめかせ　淑
ポケベルの鳴る雑踏の中　る
無党派層選挙参謀票読めず　淑
鱈ちりつつく北国の月　敏
どか雪に積りどかどか雪となり　篤
網棚の荷のふいに消えたる　同
人形の腹に麻薬を押し込んで　敏
あくび出さうな牧師説教　代
オルゴール花の真昼を奏でつつ　淑
おらんだ坂を下るうらうらか　代
羊の毛刈れば羊のさっぱりと　敏
おてんこ盛りの小屋の麦飯　淑
済みしこと又催促の惚けはじめ　る
貧乏ゆすり何故か止まらぬ　代
パンストを脱がす背中の汗臭く　敏
鏡天井彼の肩越し　篤
たそがれの電光文字の流れをり　る
評判通り野茂の投球　敏
濃紺のトートバッグに夢をつめ　代
盆の休みを告げる貼紙　淑
盛り塩に月皓々と登り窯　る
秋の七種一つ忘れて　篤
消しゴムのいびつの形父らしく　同
孫に語りし戦争の傷　淑
円高も株の安値も底ならん　代
CDジャズを文鳥と聞き　同
峠路眼下に白き花万朶　弘
春雷の後雲のゆるやか　る

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　穴澤篤子　豊田好敏　金久保淑子
浅賀淑代　萩原てるこ

歌仙「梅雨の雷」　上月 淳子　捌

犬の耳ぴくと動きて梅雨の雷　淳子
　凌霄かづらからむ門柱　治子
サーファーの鮮やかな彩とりどりに　郁子
　カメラアングル決めかねて居り　香
草原の果を離るる望の月　良彌
　夜食こっそり作る弟　かりん
運動会応援団長引き受けて　郁
　就職先で決めるフィアンセ　ん
ラブコール切れず切られずきりもなや　治
　ぽっぽぽっぽと鳩時計鳴る　香
気管支にするする通る内視鏡　ん
　ブランドものを着ぶくれの人　郁
大覚寺凍月睨む鬼瓦　香
　地酒探すも旅の楽しみ　治
年金と孫の自慢の同窓会　彌
　藍染に凝り手まで染めてる　郁
花の奥何か倖ありさうな　郁
　フィレンツェの丘うららかに佇つ　彌
メジチ家の興亡語り春深し　郁
　大河は常に小さき川呑む　治
関心の薄きに迎ふ投票日　彌
　尺取をよけ歩道横切る　香
翁像採茶庵より引っ越され　郁
　親の形見を粋に着こなす　同
うかうかと女の手管に乗せられて　彌
　跪かせて舐めさせる足　ん
トウシューズアンネンポルカアラベスク　同

教会の鐘遠く響きぬ　香
月見船うからやからと賑かに　治
　尾塩たっぷり焼きし落鮎　同
近く秋の定年近く夢多き　郁
　大学教授習ふパソコン　ん
一を聴き十知る人と煽てられ　香
　長編読了しらじらと明け　彌
花追ひて今日はこの里養蜂家　淳
　囀り高く遠き山々　執筆

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　加藤治子　東郁子　若松香
　佐藤良彌　登坂かりん

歌仙「白南風や」　坂本 孝子　捌

白南風や水門叩く小名木川　孝子
　道のほとりに咲かす射干　一恵
かぶと虫角くらべ合ふ子等寄りて　ゑみこ
　立ったるままに蕎麦を啜りぬ　水壺
引越しのやっと片付き仰ぐ月　恵
　山家にも似てこれよりの秋　壺
登高のワンダーフォーゲル軽やかに　恵
　電話でチュッと送るくちづけ　こ
手にしたる写真は別の男にて　壺
　古い上着に隠す容疑者　こ
臘八会衆生に垂るる慈悲の笑み　よしえ

月天心に凍つる蒟蒻　壺
斜陽館津軽の夜を深酒し　恵
　文学やめて夢は漫画家　同
外人に投げ勝つ野茂のトルネード　え
　チャーター便の越ゆる海原　こ
再会の花に涙がこぼれます　え
　二部合唱の揃ひうららか　こ
聖週間巡礼続く甃　恵
　薬づけにて盗む魂　こ
宝冠のルビーを鳩が啄みて　恵
　なけなしの銭出してしょば取る　壺
汗だくで働いて来し戦後なり　恵
　開拓村に別荘が建ち　え
奥方の抱かれて洩らす里ことば　恵
　ちらりと見ゆる脛毛かしこし　壺
何ひとつ取り柄の無きが取り柄にて　同
　植木鋏の響くお隣　こ
犬つれて鍵閉めにゆく月明かり　え
　人に食はせぬ老のからすみ　壺
横丁に小さき刈り田のプランター　恵
　きのうの雨をはねるトラック　え
悪口の誤解もとけて仲直り　壺
　遠く近くに囀を聴き　え
別染めの裾さやさやと花を浴び　子
　都踊りのお薄一服　こ

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　山崎一恵　吉村ゑみこ　今宮水壺
　若尾よしえ

## 歌仙「土用芽」　下鉢 清子 捌

なかんづく土用芽しるき薔薇の垣　清子
片蔭拾ひ川沿ひの町　嫋
蜊蛄に触れたがる児が踊り場に　健悟
郵便受けにメールいっぱい　代々子
皎々と月照り渡る操車場　蓉子
夜勤を終へて帰るやや寒　碧
おひろめ(ウ)の地酒待たるる文化祭　悟
ピエロおどけて投げキッスする　代
嘘つきのひとの残せし紅の痕　嫋
新々宗教捜査着々　悟
ミャンマーはスーチー女史を解放し　碧
狐の提灯見えつかくれつ　蓉
底冷の蔵の格子戸月さして　嫋
全輪駆動ふるさとの径　碧
カラオケの賞金稼ぎとうたはれぬ　代
有給休暇きっちりと取り　悟
花ふぶく浮桟橋に人の群　同
三宝柑の香りほのかに　蓉
大本山永平寺領鴉の巣(ナオ)　嫋
優勝狙ふ強化合宿　代
目覚むればスクープ報道ゴシックで　悟
臍(ほぞ)を噛みつつ啜るコーヒー　碧
薪能乱拍子踏む主役(して)の技　代
羅を被て妙齢の鬼女　嫋
帰さない介抱してと拗ねに拗ね　清
マザコンあやしベンツせしめる　悟
真贋の論争の裏画商肥え　蓉

古雑誌よりかまどうま跳ぶ　碧
望の月ビルの菜園覗くごと　代
予備校生が爽籟の中　嫋
方丈記おくのほそ道丸暗記(ナウ)　蓉
シルバーパスで都内観光　同
コラーゲンたっぷり入りし茶が流行り　嫋
文通の囲碁すでに終盤　悟
花の苑馬に試乗の夢ひとつ　清
G線上のアリアうららか　碧

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　八代嫋　佛渕健悟　橋野代々子
五味蓉子　松本碧

## 歌仙「翁像」　中川 哲 捌

白蓮の微笑む如し翁像　哲
風ゆるやかに透る縮布　紀子
帰省子の話あれこれ埒もなし　和弥
牛乳パック忽ちに空　達子
拾ひ猫すりよってくる月の宵　澄子
斧を挙げたるままに蟷螂　美恵
秋出水見舞の客のつぎつぎに(ウ)　紀
門柱にある彼のイニシャル　弥
耳たぶにエンゲージピアス光らせつ　恵
特急のぞみひた走るなり　達
選挙区の後援会で吹いたほら　哲

厄払とてふんどしを捨て　紀
鋸音の月光に冴ゆ谷深し　弥
ドナウの流れ国境を過ぐ　恵
神父様長き法衣の裾を曳き　澄
人形芝居すでに開幕　弥
市中の花通り抜け通り抜け　紀
若布の椀に沈金の紋　同
十返舎一九の風邪も春興や(ナオ)　弥
八つぁん熊さん顔を見合はせ　達
摩天楼最上階の大パーティ　澄
輸入ワインに輸入野菜で　恵
あめんぼも知らぬ子供を育て来し　同
わたしのをんな度どのくらいかな　達
滅茶苦茶をしたい火傷もしてみたい　紀
縫針の穴遠く小さく　恵
納戸にも長廊下にも梁童(はりわらし)　弥
失せものさがす婆さまの月　達
焦したるバター多めにシャンピニオン　澄
芸術祭に猿出番待つ　紀
綱渡りでんぐり返し一輪車(ナウ)　達
まなざし遥か故郷の山　澄
太公望釣れなくてよし釣れてよし　達
みんなで渡る薄氷の橋　弥
花宴笛や鼓の緋毛氈　哲
近き梢に巣組する鶸　澄

平成七年七月九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　篠原達子　八角澄子　権頭和弥
椿紀子　山口美恵

歌仙「泥鰌鍋」　中島啓世　捌

高橋や富士はも見えね泥鰌鍋　啓世
膝をくづして梅酒一杯　泉子
松葉菊崖よりしだれ盛るらん　和子
坂道をくる配達のひと　道子
窯出しを了へて陶工仰ぐ月　政志
ロンドの如くすだく鈴虫　シズ
秋深し野茂の記録を数へゐて　和
射すくめられたる彼のあの目に　道
いいえいえとんでもないと十字切り　シ
きのふ決りし芥川賞　泉
雨だれの拍子少々乱れがち　政
寒猿枝に下る月の図　和
襟巻を立てて西安バイク族　泉
ギブスにあけた穴をくすぐる　道
子供等の夢を未来に羽ばたかせ　シ
衛星放送語学達人　泉
咲き満ちて歴史を秘めし花大樹　シ
草餅ついて餡をたっぷり　和
東風吹いてめぐり逢ひたる菩薩様　泉
照るも曇るも凪ぎてゐる海　政
核実験阻止する船は狙はるる　和
鍵穴なんぞへの河童とさ　泉
旅の宿軒に又来る夏燕　道
五十路をすぎて灼熱の恋　政
欲望に誑かされて捩ぢくれて　和
今頃飲んでも利かぬおくすり　政
月明かし翁の句碑に燻る香　道
そぞろ寒さの狂言の枡　シ
小走りに募る仲間と今年酒　政
頁の間に挟む思ひ出　啓
揺椅子にペーチカ燃えてとろとろと　シ
棚に並びし優勝の楯　道
詠唱の高音きまり沸く拍手　泉
春挽絲で紡ぐデコルテ　道
濃紫リモージュの皿花浮かべ　啓
陽炎の立つ唐草の門　政

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　青木泉子　式田和子　加藤道子
峯田政志　小野シズ

歌仙「青鬼灯」　中田あかり　捌

大ぶりな青鬼灯を選びけり　あかり
ちりと鳴りたる軒の風鈴　遊
水鉄砲逃げ廻る児を追ひかけて　志げ子
もらった菓子を犬に分けやる　八重子
読みさしの詩集のページ月明かり　文子
秋寒の中電車過ぎゆく　守男
鉾並ぶ四宮祭集ひ来し　文
上方ふうに弁当の味　遊
あひのこもいまはハーフと名を変へぬ　同
小粒なダイヤきらりピアスに　男
気障な奴惚れてしまへばいい男　文
池面に影をうつす雪吊　遊
歳暮待つ月を案内の門の前　志
馴染みの鸚鵡カムインと言ひ　遊
NOMONOMOの声援あがるアメリカよ　文
増刊号の並ぶ店頭　志
花の雲つき抜けて建つ高層群　遊
春塵浴びて野外演奏　志
盆の上利茶に迷ふ碗の数　同
夢も時間もたっぷりとあり　遊
どぎゃんしてこぎゃんすっとともっこすが　同
髭題目の碑に雨　八
作柄は天気次第の技術国　男
電話ボックス残す香水　八
きぬぎぬのテレビキャスター弁解し　男
身に覚えなき隠し子の出で　志
風説を流布し株価を吊りあぐる　八
麓を照らす真夜中の月　男
濁酒若者向けにネーミング　文
老は持薬の茯苓を干す　志
自分史はひらたく云へば自慢史で　遊
旅行帰りの土産両手に　男
幽霊も妖怪変化もお友達　文
トランプ占ひ吉と告げられ　志
滝桜花さやさやと揺れてそろ　り
弥生狂言おろす緞帳　八

平成七年七月十九日　於　江東芭蕉記念館
連衆　雑賀遊　蒲原志げ子　本田八重子
橘文子　近藤守男

歌仙「梅雨の門」　蒲原　志げ子　捌

降るといひ又降らぬとも梅雨の門　志げ子
雀の翅をふるふ真清水　孝子
夏期講習括弧でくくる式解けて　淑子
禁煙忘れさがすポケット　一恵
漆黒の空の片隅三日ノ月　治子
長夜の地下を工夫掘りつぐ　和代
新米の弁当を売る笑顔そへ　孝
いつもの列車あの娘気になる　恵
逢はざれば電話手帳にファクシミリ　淑
領収証は出さぬ菩提寺　孝
棟上げの頭の渋き木遣節　淑
アールグレイのお茶をおかはり　代
月浴びて滑るスキーの童話めき　恵
狐が盗む銀色の魚　治
陰謀の仲間か公選弁護人　孝
隣の新聞のぞき読みする　治
北上へ一里あまりの花訪ね　孝
お広め屋ゆく弥生狂言　恵
古びたる旧約聖書鐘霞む　淑
荒れ野すぎれば死海鈍色　恵
飽食の塩で揉みだす皮下脂肪　代
愛されてをりあるがままにて　孝
夢に聞く蚤のむつみごと　げ
サマータイムでつのる寝不足　治
やっちゃ場の車触れたる売り言葉　孝
景気直しに積みし菰樽　同
戦災も震災も知り路地ぐらし　淑
三代つづく江戸の指物　代
俳諧師異国の月を詠むならん　同
穴惑ひしてよぎる縞蛇　治
粧ふ山天折の吾子眠る沢　孝
ヘリで荷揚げの気象観測　淑
ジーンズの裾のフリンジすり切れて　代
やまと蜆の匂ふ味噌汁　恵
花どっと散るも奢りの宴なる　げ
掛け声高く揚る大凧　治

平成七年六月二一日　於　源心庵
連衆　坂本孝子　金久保淑子　山崎一恵
加藤治子　長崎和代

歌仙「神輿瘤」　雑賀　遊　捌

肩脱ぎてこれみよがしや神輿瘤　遊
辰巳の風の吹き通る頃　和子
てんと虫絵本の縁を進むらん　健悟
紙縒教へる根気良き父　美恵
石投じ川面の月を騒がせり　弘子
秋味の報届く週末　悟
菊人形贔屓役者によく似たる　和
妻に内緒で定期解約　悟
口紅のつきし煙草を捨てかねて　恵
フリーウェイを飛ばすビュイック　和
ワグナーに心酔したる独裁者　恵
熱燗酌めばおしゃべりになり　弘
式台に並ぶ浅沓月凍つる　和
犬に曳かれてホームレスゆく　弘
副都心公約通す知事のゐて　恵
美術館建ち名画少々　和
豆腐買ふ道に逢ひたる花の雨　悟
蛙握って走るこども等　同
老人の増ゆるばかりで山笑ふ　和
悩み明るく叩くワープロ　悟
ブランドに凝りて頑張る自己輸入　弘
色鮮やかな蜘蛛の潜める　和
ほろせ掻く指まで愛し蔵の中　悟
一粒しぼり根掛けがっくり　和
冬の浪借りたボートを押し流し　恵
原発地帯蔽ふ静寂　悟
連句とは森羅万象虚実混ぜ　和
月の光にCDを聴く　恵
やや寒に時代遅れの真向法　悟
鶴鴿の尾の石を叩きぬ　恵
ふるさとを偲びつづけて半世紀　弘
駅のごみ箱いつも覗いて　恵
空を飛ぶ夢をフロイト分析し　同
土手にあはあはつくしんぼ伸び　弘
花万朶誕生仏に散りかかり　遊
独りの部屋に灯す春燈　弘

平成七年六月二一日　於　源心庵
連衆　式田和子　山口美恵　市野沢弘子
佛渕健悟

歌仙「青梅や」　橘　文子　捌

青梅や「季寄せ」の手擦れはげしかり　文子
初蜩の透きとほる声　みづゑ
教室にポロシャツの子等並びゐて　淳子
生地を叩きてクッキーを焼く　利子
月の海水尾を引きゆく漁り舟　麻子
景気談義の果てぬ夜仕事　政志
乾(ウ)盃の音頭を取りし今年酒　利
同志を募るチョンガーの会　麻
訳知りの姉さん女房に甘ったれ　淳
二人の間に入る三毛猫　ゑ
髪の伸びスピード出世に追ひつかず　淳
お金のことは全てお任せ　麻
取っつきは何でも屋なり月冴ゆる　ゑ
牡蠣に海鼠に蕪に切干　淳
胃カメラを撮れと流行らぬ街の医者　利
テレビ吉宗元気印に　麻
小鼓の音響き来る花の昼　淳
甘茶参らす尺の釈迦牟尼　志
山笑(ナオ)ひ初めし頃より陶土掘り　利
納戸に積めるバザー用品　淳
南北の和して難民溢れたる　利
水煙草吸ひ憩ふ緑陰　ゑ
翡翠の雌に捧ぐる魚一尾　利
恋の翼で越えし高塀　志
目覚むれば瓦斯の火燃えて嬰も居て　麻
処女の無き世を嘆くドラキュラ　利
塵埃の山どっと吐き出すOA機　ゑ
地球にやさしと云へば売れ筋　麻
半生の心に残る月幾つ　利
変らぬものに江ノ島の松　淳
少年(ナウ)の夢を育む鬼やんま　麻
作曲に凝り漫画にも凝り　ゑ
ベルギーへスケッチ旅行誘はれて　淳
春の帽子のつば上げてみる　ゑ
ゆるやかに枝揺らしをり花大樹　文
根付の鈴を鳴らす夕東風　志

平成七年六月二十一日　於　源心庵
連衆　山口みづゑ　上月淳子　梅田利子
内田麻子　峯田政志

歌仙「夏至近し」　豊田　好敏　捌

夏至近し葛西の駅に風通る　好敏
青葉隠れに伸びる舗装路　瑞枝
浴衣の子くびれた足を投げ出して　智恵
シュークリームをふっくらと焼く　路子
月代に待ちたるもののくる気配　あかり
囮の籠のすこし揺らぎぬ　子
ことし酒自慢の出来と杜氏言ひ(ウ)　恵
掌中の玉むすめ窯ぐれ　り
甘い声甘いマスクにすぐころり　恵
王座の価値はいまやかた落ち　敏
羊頭をかかげ狗肉を商ひし　子
サイレンいくつ過ぐる遠火事　枝
山門の聳えたちたり寒の月　恵
在日三年免許皆伝　枝
椀こそば早食ひいつか身につきぬ　恵
不況知らずで太るコンビニ　子
大江戸は邪教争乱花吹雪　枝
目かる蛙をちょっと蹴飛ばし　り
野茂(ナオ)投手トルネードにていまや春　子
積み荷重たき隊商の列　り
天平の御物の琵琶のさびさびと　枝
眠れば夢に獏がでてきた　恵
ダイバーのグランブルーに追ふ魚群　枝
心臓手術名医なる友　恵
顔埋む胸は嘘つく鼓動して　枝
おんな殺しのしけた噺家　り
持て余す世界都市博入場券　子
鴉を防ぐ生ゴミの網　枝
船を曳く月の浜辺の雲迅く　子
黄色主調で描くまるめろ　敏
秋扇(ナウ)要ゆるみし老いの果て　恵
キリエレイゾン澄めるユニゾン*　枝
大時計長針進むくせのあり　り
ふはりふはりと遊ぶ初蝶　子
根を継ぎて生かす大樹は花万朶　敏
機械づくりの草餅を買ふ　り

＊キリスト教の賛美歌

平成七年六月二十一日　於　源心庵
連衆　大窪瑞枝　須田智恵　倉本路子
中田あかり

歌仙「額咲くや」　中島啓世　捌

額咲くや手古奈に似たるひとよぎる　啓世
さざ波涼し汐入りの池　澄子
夏座敷縁ひろびろと磨かれて　明雅
馴れぬワープロぽつぽつと打つ　安子
月皓く無事に終はりし幹事役　庸子
芋煮の会は故郷(ウ)の村　雅
鶴鴿を追うて二匹の犬が駆け　安
誘ひの電話親がすぐ出る　庸
鼻ぺちゃのくせに瞳がぱっちりと　雅
金のマニキュア銀のペディキュア　安
暗き堂修復終へし飛鳥仏　澄
色即是空いつの頃より　雅
麩饅頭寝酒のあとの寒の月　同
コレステロール注意する冬　庸
夢持てとエステ通ひを勧められ　安
人形時計ごあいさつする　啓
爛漫の花の中なる岡崎城　安
春田をかへす農夫をちこち　澄
ドーヴァー(ナオ)のトンネルぬけて復活祭　雅
カルティエラタンに埋む生涯　同
宰相の売ったは長い眉ばかり　安
原爆実験やはりやるとか　澄
日本中芥の山に塵の海　雅
毒(ポイソン)の香が身に迫りくる　啓
どうやってキッスしませうノッペラボウ　安
紅涙潸々鬼哭啾々　啓
雲晴れて月影映す　潦(にはたづみ)　澄

トランプ遊び夜長灯して　庸
藍瓶にまとふ溢れ蚊そのままに　同
少年剣士竹刀かついで　安
福送(ナウ)るつもりの河豚を貫ひたる　同
きんとんづくしごまめかずのこ　澄
とび入りのヴィオラを合せクァルテット　同
卒業祝ひに紺のスーツを　庸
読みふける「天の夕顔」花吹雪　啓
昭和も遠しおぼろなる鐘　庸

平成七年六月二十一日　於　源心庵
連衆　東明雅　八角澄子　神谷安子
久保田庸子

歌仙「夏椿」　東郁子　捌

閑もれる数寄屋造りや夏椿　郁子
千々に砕くる滝の白糸　道子
ほの甘きワインゼリーに匙添へて　久美子
譜面見ながらギター爪弾く　美津
山の宿子らも一緒に月を待つ　哲
夜寒の庭に紛れ込む猿　よしえ
芸術祭賞取りそこねかこつ人(ウ)　哲
母性本能またもむくむく　久
ひとまはり若き男をリードして　え
キャロットジュース健康によし　久
詐欺まがひお布施お布施とふんだくり　同
青木ヶ原の樹海果なく　道
寒月に馬橇の鈴の冴えわたる　津
バターで焼きし旨き蕎麦掻　同
旅好きは穴場探しの名人で　久
詩集一冊懐にせる　哲
花筏ふたつに分けて家鴨行く　久
天秤担ぎ春泥の径　道
取り寄せし銘柄米の種浸す(ナオ)　同
国際相場電子メールで　哲
それぞれに思惑含む両首脳　道
扇で頭叩く落語家　哲
紙切りの速いが自慢傘お化け　津
越後越中雪囲ひして　え
好奇心常に旺盛爺と婆　久
お茶にかこつけ猪突猛進　え
恋敵菊の枕を送りつけ　道
五色ケ浜の波に散る月　え
高体連挑む選手の神詣　津
ラップ音楽口ずさみつつ　道
モンゴルに捕虜の哀史の半世紀(ナウ)　同
夢を託され放たれし鳩　哲
二升酒肝臓さらに強くなり　同
田楽の味少し辛めに　津
みそなはす魚籃観音花万朶　郁
指されし方に仰ぐ初虹　え

平成七年六月二十一日　於　源心庵
連衆　加藤道子　副島久美子　桑原美津
中川哲　若尾よしえ

歌仙「邸松」　東　明雅　捌

邸松涼しき風の通ひけり　明雅
紫蘇の香りを添へる盛鉢　英子
パソコンの詩作漸く緒につきて　秀樹
爪の形も似たる父と子　美恵
悠久の大河を照らす望の月　好敏
ちっち蝉聴く山の枝径　碧
又三郎どんぐりこぼし駈けてゆく　常義
離れの気配一寸と絶える　幸子
妖怪の集団見合いつか済み　樹
まづ年増からくどく定石　敏
候補者のポスター皆笑ひをり　碧
冬の鴫の遊ぶお台場　恵
寒月の光の躍る小夜曲　幸
徳利に満たす山形の酒　英
摩訶般若波羅蜜陀心教お守りに　義
灌頂暦名仰ぎみる人　英
世界から花衣着て花見客　幸
磯の口開響く潮騒　碧
浜焼の鯛の太さに目をみはり　恵
猫十匹と暮らす楽しさ　樹
荒れ果てたスコットランドゴルフ場　同
高飛車に出る執事独身　敏
煩悩の現し世の夢恋三昧　義
汗疹できたは抱擁の果て　敏
百年の大屋根の庭蝮棲む　碧
金銀財宝蹲踞の下　幸
めのこ算玉串料のはらづもり　恵
木の葉山魚を焼いて出すシェフ　義
草枕旅の一座の後の月　英
夜霧に濡れて偲ぶ故郷　恵
赤煉瓦煤けしままに暖炉燃え　樹
スキー合宿にぎやかな群れ　幸
視察団ホテルラッシュのアトランタ　英
税申告にねぢり鉢巻　敏
淡墨の桜は花のまっ盛り　雅
田打ち畦塗る谷深き里　碧

平成七年七月二九日　於　中村橋佐古邸
連衆　佐古英子　青木秀樹　山口美恵
豊田好敏　松本碧　生田目常義
瀬野幸子

歌仙「芒原今昔」　坂本　孝子　捌

芒原今昔白うつなぎけり　千町
水ひそやかにはしる明月　孝子
炭で焼く秋刀魚に優るものもなし　好敏
3DKに子供三人　淑代
営業の売りは専らレジャーカー　瑞枝
折線グラフ下がる年の瀬　同
雪深き修道院に酒醸し　代
唖の男の腰に鳴る鈴　町
旦さんのお妾さんに手をとられ　敏
スクエアダンスに恥ぢらひしこと　代
クレーンの聳ゆる丘の新開地　敏
尺取虫が尺きざむ窓　町
月涼し筑紫の琵琶の撥さばき　枝
海に沈みし兵を弔ふ　同
岬には野生の馬の駈けめぐり　代
礼状かねて出した絵葉書　敏
本日は舞台稽古と花の宴　同
ショウウインドウに春のスカーフ　代
石膏のトルソーの肩朧にて　町
煙草ばかりが光る張り込　枝
責任を取らぬ上司は栄転し　敏
櫓の上で叩く打出　枝
人形振りなこの帯に緋縮緬　町
抱けば肌の蛇が悶える　敏
メイストーム小鳥の恋は奔放に　町
宿り木の名となりし少年　代
牛乳の配られてくる音のして　同
看とりの椅子にさまよへる夢　町
ビバークの月更くるらむチョモランマ　代
うそ寒の銭もらふ皺の掌　孝
高機に絣を織れば雁わたる　枝
コレステロールとかす杜仲茶　敏
大のつく画伯文豪ゐなくなり　町
うちも隣も中流の上　枝
花八分そぞろ歩きに灯が潤み　孝
雛遊びの飽きてうたた寝　敏

平成七年九月十四日　於　緑華亭
連衆　原田千町　豊田好敏　浅賀淑代
大窪瑞枝

# 連句とRENKU（2）

浅賀 淑代

初潮を突っきって飛ぶ舳先かな　明雅
近づく島の山も秋めく　しげと

去る八月下旬、佐渡畑野町で天の川連句会主催の「第三回天の川を見る会・連句会」が行われ、島外からも明雅先生をはじめ十数名がジェットホイルに乗り込みました。

同連句会は、今回も、米国（ミルウォーキー）のハイク詩人らがファックスで送ってきた歌仙"Street of Dreams（夢の道）"の前半に、後半（近藤蕉肝氏捌き）をつけて一巻を完成させています。

dream of the shady side
a street lived on
too long ago　Karl Y.
（片陰や昔住みたる道の夢　カール・Y）
heat of a crowded bus
urban jungle　Doug
（バスの暑さよ都会ジャングル　ダグ）

このような発句、脇で始まった前半には、星、植物などの自然を詠んだ句、夜なべの裁縫やガレージでの車の整備などの生活句、有名な大リーガーらの死を詠んだ無常の句などがあり、付け・転じも意識され、前号で紹介した歌仙"Winter Rain"（『フロッグポンド』）とはさすがに趣が異なります。

海外の人々と連句を行う場合、式目の適用、季語、翻訳など、さまざまな問題が障壁となります。それゆえに大方が国際連句の将来の展望に消極的な考えにとどまりがちです。

ここ数年、国際連句協会などの海外での努力もあって、「式目」（翻訳された「ルール・ブック」）に従って連句が試みられるようになってきました。しかし、問題は、句数・去嫌、月・花を詠むこと、表の禁忌など「式目」が海外の人々のものとしてその腑に落ちるまでに、かなりの時間がかかり、しかも現地に適切な指導者が必要だということです。

季語も日本のものが、"HAIKU HANDBOOK"（ヒギンソン著）などに翻訳され、日本人の季節感が紹介されています。しかし実際には、日本の季語が海外の人々の季節感に必ずしもマッチするわけではありません。例えば、「夢の道」十七～ナオ折立を見てみましょう。

white catalpa trumpets
open throats
wait for thunder　Karl G.
（喉開けて凌霄の花雷を待つ　カール・G）
ducks return
to those who stayed　Doug
（残りしものに鴨帰り来る　ダグ）
甲板（ナオ）ワイン酌み合ふ陽のうらら　淑代
（up on deck / drinking wine together / sun sparkling bright　Toshiyo）

ミルウォーキーは、緯度を見ると札幌あたり、春の遅い地方です。「花」は夏のイメージが強いようです。しかも季語が定着していませんから、凌霄花といっても、春とも夏ともはっきりとしないのです。鴨は、「帰り行く」のでなく、「帰り来る」ものです。さらに、「うらら」という日本人には共通する春の気分も、彼らには異なります。春の陽の明るさ（sun sparkling bright）を詠んだナオ折立の句ですが、北部の人々にとって、きらきらとした陽の輝きは「夏」のものであり、理解を得るには説明を要するようです。

現在、米国では、独自の歳時記（季語集）が編纂されつつあるようですが、日本でも、季語は一朝一夕に整えられたわけではありません。その国の人々の共通項として発酵するにはそれなりの時間を要することでしょう。

従って、日本の式目や季語だけを約束事とした俳諧の場を急がずに、まず「連句の楽しさ」そのものを理解してもらう、つまり私たちの蕉風現代連句をたくさん読んでもらうことが、バイリンガルの捌き、翻訳者を養成することと併せて、国際連句の第一歩ではないでしょうか。そのような意味でいえば、前半、後半を補完する「天の川連句会」方式は、ひとつのおもしろい試みといえましょう。

今回、待ちに待っていた私たちに、ミルキーウエイ（天の川）は、たった三十分でしたが、その淡い浪漫的な姿を見せてくれました。

## 海の記憶

椿　紀子

いつのことだったかはっきりしませんが、太陽が沈みかけて金色に輝く海を沖へ沖へと泳いだことがあります。ビロードのような引き潮に身をゆだねていると不思議にしずかな安らぎに包まれ、どこまでもどこまでも行けるような心地がしました。

「海の記憶をお持ちでしたら少し分けてください」と或る日ヒラメが言いました。

ほとんど水の涸れた井戸の底でタイとヒラメに出会ったのです。「もう長いことここにいるので、海のことはあまり思い出せないのですよ」とタイが言いました。

そこでわたしは「海の記憶」ファイルを呼び出しメモリーを遡って、四億年も前に鰓呼吸しながら陸に上った勇敢な魚の記憶から始めました。

鱗木類や藍藻類の間を泳ぐ奇妙な生き物は三葉虫やうみりんご、古事記の蛭子舟やノアの方舟、海幸彦に乙姫様、平家の公達の海の都、遣唐使たち、アラフラ海の真珠採り、大航海時代の船乗りや海賊、堀割が四方八方に通っていた江戸の町、太地のくぢら、もちろんモビィディクも。人間魚雷の兵士たち、戦艦やまと、ムルロア環礁のグランブルー、光通信ケーブルののたくる海底、そして無数の魚や鳥。

中でも浜の産屋で鰐に身をかえて子を産んだ玉依姫の記憶・・・・。敗戦前、太平洋の荒波とどろく村で末の娘を産んだ母は疎開暮らしの明け暮れにどんな海を見たでしょうか。

自分の中に海を抱える女の特権は、今老いたる母の海まで抱え込んで、日毎にその妄想の井戸の底まで降りてゆかねばなりません。

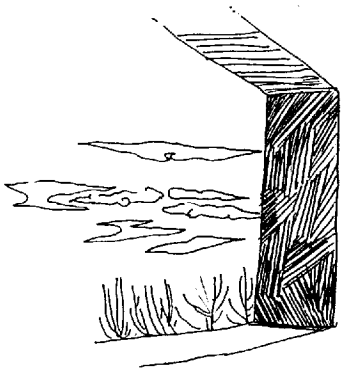
がらくたのように積んであるのは母が捨ててしまった記憶です。タイやヒラメはその中で迷子になっていました。わたしもです。

わたしの記憶がわたしだけのものでなく、目のくらむような遠い祖先からの集積であるなら、母の口から遂に聞けなかったその記憶も、どこかで生きてゆくというのか。

わたしはタイとヒラメに「海の記憶」を少しずつ分けてやり、あの亀の待つ浜で、「再見（ツァイチェン）」と言って別れました。

いつかきっと、きんいろの波をどこまでも泳いで自分の海に帰りたい。

あ、母がなにか唄っています。



## ＊連句と酒＊

「行々子庵」

中川　哲

濁り酒、鰤、烏賊、真鱈、氷見の宿
杉亭

早いもので、行々子庵杉亭さんを失ってからもう一年が経ってしまふ。

ＡＣＣの先輩だった貴方にお会ひしてから十年の間、風雅の先達であり、こよなき酒友として、連句の席はもとより、新宿や吉祥寺の酒亭で江戸俳諧や歌舞伎の話で夜の更けるのを忘れたのも、何十回におよんだことか。

サワリといへば、梅川やお俊の口説としか思はなかった私に連句のイロハを教へてくれたのも有難いが、酒の楽しみ方、食物の嗜好、身なりのお洒落を通して、俳諧の心を伝へて貰った。

今頃は、真如の月を詠みこんだ酒恋の風雅を、懐かしいあの人この人を集めて、膝送りを楽しんでゐることであらう。酒はきっとあるだらうが、生臭物の旨い魚があるかどうかが心配だ。

## 猫蓑会案内

▽『猫蓑作品集Ⅵ』作品募集

○ 形式は自由
○ 一人一篇（捌き）
○ 原稿用紙はB4判で
○ 締切は十一月末
○ 作品については東明雅先生が審査致します。
○ 送り先
〒二七七 柏市加賀二―十二―十一
梅田 利子 宛

▽ 猫蓑連句会

○ 日時 平成八年一月十七日（水）
十二時より
○ 場所 江東芭蕉記念館

§§ 著書紹介 §§

『連句で遊ぼう』 水沢 周 著
新曜社刊 ¥一八四五

著者は故行々子庵杉亭さんと親しくしていた方で、猿楽座という会を主催しています。
〒一〇一 千代田区神田神保町二―十 多田ビル
TEL 03-3264-4973

## 草間 時彦

杉内 徒司

俳諧時雨忌（昭和四十六年十月十日）の原稿を角川書店編集部の谷崎昭男氏に届けてくれないか、と義仲寺史跡保存会大庭勝一常務理事から頼まれた。

谷崎氏は谷崎潤一郎氏の甥、角川で石田波郷全集の担当だったが、その結婚式に呼ばれた大庭常務は角川源義社長から草間時彦氏を紹介され、その人柄に感服したという話をその折伺った。

まだ俳句文学館が出来る前、俳人協会が新橋三丁目の烏森ビルの六階にあった頃だから草間さんの理事長就任前の事であろう。

俳諧雑誌「杏花村」の俳諧壇消息を担当していた頃、俳人協会主催の「連句の集い」（昭和五十二年六月十八日）を取材に覗いた処、捌きを手伝わされてしまった。当日の立句は、

瀧落ちて群青世界とどろけり （秋櫻子）

で、捌きは阿片瓢郎、草間時彦、山田みづゑ、徒司の四名。

「連句の集い」は月一回で翌年七月まで十三回も続き、皆勤の捌きは結局私一人だったせいか、主催者から大事にされ、草間事務局長から近くの小料理屋「くろがね」で再度供応にあづかった事もある。

鴫立庵十九世山路閑古（昭和五十二年四月没）の後の村山古郷廿世の襲号祝賀に草間さんの立句で付廻歌仙を贈ったのもその間のことであり、尚私は図に乗って受講生の実作錬磨のためと称し、俳句文学館講堂を会場として、杏花村塾、現代連句協会主催で全国連句大会を左の如く二回開催した事もある。

第一回 昭和五十二年十一月六日（日）
第二回 同 五十三年六月十一日（日）

草間さんが『猫蓑庵発句集』に寄せた跋文によると、私が五十五年草間さんに明雅さんを引合せたとあるのは頽齢のせいで覚えてないが、考えてみると、草間さんに狎れ親しみ、連句が俳壇に異端視されていた時代だけに、俳人協会理事長が連句にこんなに打ち込んでいて大丈夫かなと秘かに懸念した事もある。

が、そんな事は全くの杞憂だった。村山古郷没後草間さんは廿一世を襲号された。

「現代の俳人で、これほど連句を理解し、また堪能な方はない。この人を得て、三千風以下、歴代の庵主たちもさぞかし喜んでおられることだろう。早く御入庵のお祝いを賑かにやりたいものである」と明雅さんは書いている。

その祝賀会（昭和六十二年九月三十日）の素晴らしかったこと！

## 質問コーナー

東　明雅

【Q】連衆に恋句をお願いしますと、「恋は苦手です」、「あまりしたことがありませんので」と逃げられ苦労することがありますが、恋句はどのように詠めばよいのでしょうか。

【A】芭蕉は恋句の名人で、すばらしい恋句を多く残しております。たとえば、

① 宮にめされしうき名はづかし　曽良
手枕にほそき肱をさし入れて　芭蕉

② 遊女四五人田舎わたらひ　曽良
落書に恋しき君が名もありて　芭蕉

③ さまざまに品かはりたる恋をして　凡兆
浮世の果は皆小町なり　芭蕉

④ ふすま掴んで洗ふ油手　嵐蘭
掛け乞に恋のこゝろを持せばや　芭蕉

⑤ 上おきの千葉刻むもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉

いずれも恋をする男女の姿態・真情が印象深く描かれた名句ですが、それならばこれらはすべて芭蕉の体験にもとづいて作られたのでしょうか。そうでないことは、私が一々証明しないでも納得されるところでしょう。「恋は苦手です」とか、「あまりしたことがありません」というのは、恋句はすべて自分の体験がなければ作れないという誤解にもとづいているのであって、逆に返せば自分が作った恋句はすべて体験にもとづいていると他人から考えられるだろうと心配して、恋愛経験の豊富な人も、他人から譏られるのを気にして、恋句を作ろうとしないのだと思います。

これには明治以後、俳句の世界が花鳥風月の自然を客観的に詠むことに専念し、人情の句・フィクション・主観を詠むことを嫌った風潮の残骸も見られます。

とも角、連句はフィクションであります。芭蕉は源氏物語の中の恋、謡曲の中の恋、あるいは市井の男女の恋からヒントを得てこのようなすばらしい恋句を作り出したのです。皆さんもあらゆる天地間の現象の中に、恋句の手がかりを求めて作るべきでしょう。

ただ、現代の芸術における恋の表現は、次第に露骨となり、ことに映画・テレビ、あるいはビデオなどにおける性の描写には目を蔽いたくなるものがあります。それらにヒントを得て、恋句を作るとき、お上品な恋句ばかりにおさめることは不可能でしょう。

また、時には激しい恋句も必要でしょう。ただ、その時、いかに激しい恋を描くにしても、その表現に芸術性をもたせるべきでしょう。「事は卑俗に及ぶともなつかしく言ひとるべし」と芭蕉は言いました。①・④・⑤はそのお手本です。

◇ 猫蓑発展基金ご協力有難うございます。
五千円　杉山壽子
一万円　うらら会
（敬称略）

◇ 基金の口座　富士銀行新宿西口支店
普通3376045　猫蓑基金

……§……§……

### あとがき

○ 秋二夜（あきふたよ）というのは中秋の名月と後の月をさしていう言葉。今年は閏八月があって（つまり一年十三ケ月の年なのである）、後の月を入れると三度の名月が見られるわけである。古人は閏月は控えめに過ごしたとか。「閏名月」は詩歌にも見つからないそうだ。お天気博士倉嶋厚さんの話である。

「一年十三ケ月」というのはいかにもフシギな気分がするが、いずれにしても月見酒ばかりは余りむずかしく考えないというのがいいようである。

季刊　「ねこみの通信」第二十一号
発行者　猫蓑連句会
編集人　〒一九五　町田市金井6-7-6　佛渕健悟
印刷所　アトリエ・Ｎｅｋｏ